



オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン

ODNJP 会報 No. 5

2023年7月1日発行

Open Dialogue Network Japan

Newsletter No.5 (July 1, 2023)

01. 会報について	p. 1
02. 運営委員会報告	p. 1
03. 委員会報告	p. 2
04. 主催イベント報告	p. 3
05. アドバンストコース	p. 9
06. オープンダイアログの本紹介	p. 9
07. メッセージ	p. 11



01 会報について

オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン (ODNJP) 会報 No.5 をお届けします。2022 年 8 月に会報 No.4 をお届けしてから早くも今年の総会を迎えようとしています。With コロナの時代にあって、この間はオンラインでの研修やイベントを中心に、日本におけるオープンダイアログのベースとなる対話による実践を継続していく方針のもと、多くの対話を重ねながら苦労とともに継続した活動を行って参りました。さらに新たに会員向けの Slack サービスを導入し、オンラインだけでは十分なつながりが持ちにくいところを補完すべく工夫いたしました。今回の会報 No.5 では、前号から現在までに活動を続けている各種委員会の報告と各イベントの報告を中心にまとめました。今後も ODNJP の活動を記録し、多くの方に知って頂けるように広報委員会として会報の定期発行に努めるとともに会員相互の交流につながっていくように努めて参ります。

文責 ODNJP 広報委員
笹原信一郎、大谷保和、杉本光衣

02 運営委員会報告

2022 年 6 月 25 日

2022 年度総会の前日に開催され、総会に諮る事項の最終確認ならびに、総会記念イベントについての確認が行われた。

2022 年 7 月 23 日

総会ならびに総会記念イベント後に開催され、新しい運営委員を迎えた初めての運営委員会となった。今年度の運営委員会の開催形式について確認した。

2022 年 8 月 27 日

ネットワーク委員会より実践報告会の提案が提出され、承認された。トレーニングコース委員会よりアドバンスドコースの参加者が決定したことが報告された。

2022 年 9 月 24 日

ワークショップ委員会より 1day オンラインワークショップの募集状態が報告された。ネットワーク委員会より実践報告会の開催要項が提案され、イベントの詳細が話し合われた。

2022 年 10 月 22 日

今回の「未来を語る会」の日程が確認された。各委員会より進行中の企画の進捗状況が共有された。

2022 年 11 月 26 日

ネットワーク委員会より、実践報告会の演題募集が終了したことが報告され、次回の運営委員会までに内容を確認することが依頼された。会員より ODNJP 会員向けメーリングリストに人材募集のメールを流して欲しいという要請があり、承認された。

2022 年 12 月 24 日

1 月に開催予定の実践報告会について、細かい事項を検討した。

2023 年 1 月 28 日

広報委員会より会報 No.5 の案が提出され承認された。会員からの求人募集や宣伝などをメーリングリストに流してほしいという要望があった際の対応について話し合われた。

2023 年 2 月 25 日

4 月以降に正会員年会費の減免措置が行われることについて確認した。会員向けのメーリングリストに流す情報についての精査が行われた。今回の「未来を語る会」の日程を決定した。

2023 年 3 月 25 日

新年度の運営委員の選出方法について話し合われた。総会記念イベントのアイデアを募集した。

2023 年 4 月 22 日

次年度の総会ならびに総会記念イベントに向けての準備を開始した。先月に引き続き、新年度の運営委員の選出方法が議題となり、最終決定した。5 月 7 日に開催予定のイベント (Dialogue on Dialogue オープンダイアログをめぐる対話 ―ダニエル・マックラーさんを迎えて―) について確認された。

03

委員会報告

「会員参加可」という記載のある委員会は、ODNJP 会員の皆さまに参加いただけます。ご関心のある方は ODNJP 事務局までご連絡ください。

トレーニングコース委員会

トレーニングコース委員会の 2022 年度の活動は、OD アドバンスド・トレーニングコースの立ち上げと運営が中心となりました。このコースは、OD 基礎トレーニングコースの次のステップとして、より深い内容を学ぶために新たに設置されたものです。多くの人に OD を提供し、社会実装を積極的に進めるために、また国内でのトレーニングコースやワークショップ等でファシリテーター役を担う人材の育成も目指しています。トレーナー（講師）としては、フィンランドで 2 年間の国際トレーナー養成コースを修了した 4 名をお招きしました。トレーナーの皆様には、それぞれのトレーニング経験を下敷きに、コース内容を時間をかけて丁寧に練り上げていただきました。結果として約 2 年間、通算 208 時間に及ぶプログラムが計画立案され、24 名の受講生とともに、2022 年 9 月からコースを無事スタートすることができました。コースは現在も走っている最中であり、手探りの中で進んでいる部分も少なくないですが、日本で OD を継続的に学んでいく道筋を作るために、引き続きチャレンジして参ります。今年度もどうぞよろしく願いいたします。（大谷保和）

ネットワーク委員会（会員参加可）

ODNJP ネットワーク委員会では、会員の皆さまが各地で育ててきた対話的な実践を持ち寄り、繋がりが作られ、そして取り組みを必要とされる方々とも繋がっていくような、そんな仕組み作りを目的として活動を行っております。また、委員会自体も安全な対話の場となるよう、委員同士がお互いに配慮しながら運営をしています。

2023 年の 1 月に実践報告会を開催、準備にあたっては半年以上の時間をかけてネットワーク委員会の中で話し合いを重ねて参りました。報告会では冒頭に安心・安全についてネットワーク委員会からそれぞれが思う事を投げかけ、各地で会員の皆さまが仲間と共に実践されている多様な取り組みをご紹介いただき、地域ごとに分かれて交流を図る機会を設けました。

これからも各地で取り組まれておられる会員の方々と共に、各々の実践にとって（或いはこれから実践しようとされている方にとって）の励みに、そして対話的な取

り組みのネットワーク作りの支えとなるべく活動を行って参ります。

新しいメンバーも募集しておりますので、人と人との繋がりを作っていくことに関心をお持ちでしたら、ODNJP までご連絡下さい。新鮮な風を取り入れながら対話を重ね、一緒に考えていけることを楽しみにしております。（神野唯史）

広報委員会（会員参加可）

広報委員会では、① ODNJP の活動を会員の皆さまに発信すること② ODNJP の活動を広く社会に発信することを目的に活動しています。

昨年度は、委員 3 名で月 1 回 60 分程度の定例委員会（第二水曜 20:30- が多い傾向）を Zoom で行いながら、会報の発行、ODNJP コミュニティ Slack の運用を行いました。来年度は、今年度の活動を継続しながら、新規委員をさらに募集して多様な視点のもとその広報活動を充実することを目指して行きたいと考えています。そのために、私が広報委員会の活動をしていて良かったと思ったことを 3 つお伝えさせていただきます。

1. オープンダイアログの実践を志している知合いが増える
2. オープンダイアログに関する情報が多方面から入ってくる
3. 会報や Slack を通して、多くの会員の方に喜んでもらえる

一つでも興味を持たれました方、ぜひ広報委員会の活動に無理ない範囲でボランティアとして一緒に活動してみませんか。会員の皆さまからのご参加を楽しみにお待ちしております。来年度もどうぞよろしくお願いいたします。（笹原信一郎）

ワークショップ委員会

ワークショップ委員会では、2021 年末よりミーティングを重ね、主に初学者を対象に①オープンダイアログの学びを深める機会を提供すること②学ぶ者同士でネットワークを作る機会を提供することを目的とした 1day オンラインワークショップの開催準備を進めてまいりました。今年度、2022 年 11 月 6 日に第 1 回、2023 年 2 月 5 日に第 2 回のワークショップを開催できたことを嬉しく思います。参加者の皆様には温かい学びの場作りを担っていただき、また、プログラムへの貴重なフィードバックを頂き、感謝しています。来年度は、1day ワークショップのブラッシュアップを図りつつ、四半期に 1 度の開催を継続し、より発展的なワークショップについても検討していきたいと考えています。（山田成志）

サービス提供システム研究 ワーキンググループ (WG) (会員参加可)

サービス提供システム研究ワーキンググループ (WG) は 2021 年 8 月に開始し、月 1 回程度のペースで開催してきました。2022 年 5 月に、神戸労災病院精神科の植村太郎さん、7 月に、岡崎クリニック / ACT-ONE の岡崎公彦さん・戸田竜也さんにお話しを伺いました。この回を最後に本 WG は休止しています。(石原孝二)

04 主催イベント報告

オンライン連続シンポジウム 2

精神科サバイバーの経験と「統合失調症」というラベル (ヒアリングボイシズ? 「統合失調症」? スキゾフレニア?)

2022 年 4 月 2 日 (日) 17:00 ~ 20:00 オンライン
参加費: ODNJP 正会員・賛助会員 無料、非会員 3,000 円、当事者= (元) 精神科ユーザーの方 無料
シンポジスト: オルガ・ルンシマン (Olga Runciman)、レイ・ワディングガム (Rai Waddingham)、高木俊介
企画: 石原孝二、高木俊介、松本葉子、村上純一

2022 年 4 月 2 日 (土) にシンポジウム「精神科サバイバーの経験と「統合失調症」というラベル (ヒアリングボイシズ? 「統合失調症」? スキゾフレニア?)」が開催されました。このシンポジウムは、「声が聞こえる」経験があり、精神科医療のサバイバーであるデンマークのオルガ・ルンシマン (Olga Runciman) さんと英国のレイ・ワディングガム (Rai Waddingham) さんをお迎えし、また日本からは ODNJP の共同代表でもあり、「統合失調症」への病名変更に関わった高木俊介さんがシンポジストとして参加し、診断が持つ意味と当事者の経験について考えを深め、議論していくことを目的として企画されました。このシンポジウムは関心が高く、参加登録者は 333 人で、当日も多数の方にご参加いただきました。(石原孝二)

2022 年度総会記念イベント

2022 年 6 月 26 日 (日) 13:00 ~ 16:45 オンライン開催
参加費: 会員・賛助会員 無料、非会員 2000 円、非会員当事者 500 円

プログラム

第 1 部 全体セッション & 質疑応答

身体拘束要件緩和問題から見る国家意思 ~ 何故身体拘束をしやすいしようとするのか?

講師: 長谷川利夫氏、司会: 斎藤環氏

第 2 部 14:00 ~ 16:45

分科会 & クロージングセッション

分科会①: 「薬をめぐる対話 2」高木俊介、石原孝二、村上純一

分科会②: 「きくということ」三ツ井直子、矢原隆行、森田展彰

分科会③: 「オープンダイアログ入門」斎藤環、大井雄一

ODNJP 実践報告会

2023 年 1 月 29 日 (土) 13:00 ~ 17:00 オンライン開催
参加費: 無料
参加者: ODNJP 正会員・賛助会員

ODNJP では第 5 回目となる実践報告会をし、日本の各地で活動されている正会員の皆さまから、日ごろの実践についてご発表していただきました。今回は、5 会場 (A ~ E 会場) で計 14 演題が発表されました。各会場の見守り人より、それぞれの会場の様子についてご報告いたします。

分科会 A 会場

A 会場では、実際にオープンダイアログのミーティングを複数回体験されてきた方々の声を聞きました。演題①は、トムさん、トラさん、母さん、まりあさん、シンさん、タマキさんのオンラインを活用したオープンダイアログのミーティングについて。トムさんの体験から紡ぎだされている言葉は胸を打ち、自己肯定感を取り戻せたという言葉に希望を見ることができました。これから対面のミーティングの経験を増やし、オンラインの長所短所をさらに見極めていくことが必要だと感じました。

演題②は、家庭教師としてダイアログを重ねてこられた園田さん、伊藤さん、玉田さん、そして当事者家族

のお二人による報告でした。安心感が生まれてきたという OD ミーティングについて、家庭教師の三人と当事者家族のお二人が相互にリフレクティングの形をとって声を重ねていく時間に、現在も続いているプロセスを、共に体感させていただくことができました。リフレクティングという形で双方向に声が届きやすくなる、そんな関係の変化が生じることを実感します。聞かれなかった声が再び聞かれ始める、そんな空間を作ってこられた二組の発表者の皆さまに心からの感謝と敬意を表します。二つの実践報告を聞きながら、今後ともオープンダイアログの実装に向けた取り組みを続けていこうという思いを新たにしました。(高木俊介、三ツ井直子)

分科会 B 会場

演題 3：福祉事業所でのオープンダイアログ勉強会 2 年間の振り返り

支援機関として広く展開しているつむぎ福祉会の皆さんによる勉強会のご報告。二年目の今年は、安心安全の場をつくることを目標にしているとのこと。勉強会は緊張感があるが、得られることの多い場であるに参加するようになってから、話を遮られずに話すことができるようになった。ダイアログを体感する中で、まとめないと、決めないと、という原則から、対話の中で新しい発見ができるようになった。勉強会の場が鎧を外す時間になっている等。職場内での実践が行われている事に素晴らしさを感じる、という声がリフレクティングの中でも聞かれました。

演題 4：琵琶湖病院における対話実践の試み

地域移行ユニットでの取り組みを、動画を交えてご紹介下さいました。病院で対話する事の矛盾や難しさなどについても言及されていました。自身が安心な場を探していた、自分が開示したものを大切なこととして扱ってもらえた、とおっしゃる発表者の方もいらっしゃいました。

動画の内容は、以前隔離室に入っておられた女性とその伴侶との対話を映したものでしたが、お二人が本音で語っておられることがしっかりと伝わってくる場面でした。発表者、リフレクティングチームともに、胸に迫ってこられている様子がとても自然で、暖かく感じられました。

演題 5：精神科病院における OD 国際トレーナーと協働した OD 研修と組織導入の過程～中間報告～

昨年からはじめられたオンラインでの研修についてのご発表でした。病院の中で始まった対話実践の場に、病院の外から参加される方がいらっしゃるなど、垣根を越えた活動であることが伝わってきました。

リフレクティングチームからはこの場が出来たこと自体を評価する言葉が聞かれました。なぜそれが実行できたのか、との問いかけに対し、初めから経営陣と協働で

きていたこと、経営側からも積極的に支えてもらえたことなどが挙げられていました。

発表者同士で前もって自己紹介しあっていたからか、スタートしたときから仲間のような雰囲気。「組織の土台をどのようにしてつくったか」をほっこりした絵であらわしたり、「隔離室から地域に出られた経緯」をインタビュー動画で示したり、説得力あるプレゼンが続きました。涙を拭きながらの振り返りが 1 時間以上続き、困難乗り越える絆が結ばれた分科会でした。(大熊由紀子、西村秋生)

分科会 C 会場

太田：C 会場では 3 つのご報告がありました。それぞれ多少の変遷を経ながらも「オープンダイアログ」または「対話」をキーワードとする個性的活動を深めようとする熱意と工夫が感じられるお話でした。また、単なる活動紹介が目的ではなく、発表者が互いの存在をケアしつつ安心して自分の気持ちや意見を出し合える配慮がされているのが感じられました。全体にあたたかく明るい時間が流れていた感じがしました。笹原さんはどうでしたか？

笹原：はい、C 会場の見守り人としてタイムキープに気を配りながら 3 グループの対話的な発表を聴かせて頂きましたが、ぐいぐいとそれぞれの世界観に引き込まれて行きました。時間が過ぎるのが本当に早く感じました。それでも 3 グループとも他のグループの発表時間が確保出来るようにとタイムキープにも協力くださり、本当に温かい雰囲気を感じました。また、30 名前後の方が休憩時に一部入れ替わりながら C 会場に参加下さいました。それぞれの発表については、太田さんはどのような感想を持たれましたか？

太田：どのグループもこの 2～3 年以内に始まった若々しい活動でありながら、「りすにんぐファーム」さんも「FLAT」さんも延べ 700 人前後の参加者があること、また「たがしゅう対話重視型コミュニティ」さんでは実に多様な活動が精力的に試行されているというパワーに驚きました。演題 6 と 7 では、司会者も招いてのリフレクティングの時間が用意されていました。演題 8 では、同じグループ内の発表者間での率直なリフレクティングが試みられました。いずれも短い時間でしたが、会場に多少なりとも多様な声を届けられたと期待します。

笹原：とてもポリフォニーな内容であったと私も感じました。私の視点からは、演題 6 のリスニングファームのみなさんは、それぞれの声をとても大切にしている温かい雰囲気がすごく私は印象的でした。それを象徴するような発表者の方の「話を聞いてくれる親戚が増えた感覚」という声が、とても私の中で響きました。また、演題 7 の FLAT とヴィータでは、利用者のみなさんのニーズとして“オープンダイアログを誰もが受けられるようにしてほしい”との声に応えるべく、これから即時応

答の取り組みを始めるというところが、とても印象的でした。そして、演題 8 のたがしゅう対話重視型コミュニティのみなさんは、お互いの信頼関係がともしっかりしていて当日の進行もとてもスムーズで、「対話が当たり前の社会を実現したい」というみなさんの声が重なりあった結果だったのではないかと私は思いました。

太田：どのグループの活動も精神医療の一環ではありません。「対話の日常化」「対話的コミュニティの形成」というとても大事な課題と方向性を明示してくれた皆さんでした。基本的に誰にでも開かれた場を地域やオンラインで展開しつつ、参加者の実際のニーズに対話的に応答しようという姿勢は、参加された多くのみなさんに響いていたと思います。どのご報告にも、私自身も活動に参加したい、と感じさせる魅力がありました。

(太田茂行、笹原信一郎)

分科会 D 会場

演題 9：OD を援用した支援者の育成に関する報告

臨床心理士の発表代表者が、オープンダイアログを学びたい人のために講義と研修の場を提供してこられたという。

最近、実際のケース提供者の方に参加いただき、10 回のセッションを始めているという。ケース提供者には負担がかからないように、発表代表者が代弁する形で行うなどの工夫をしている。この方法は安全な一方で、直接話せないことのフラストレーションが残る面もあるという。

こうした試みの中で、あらためて「対話とは何か?」「本質的な問題の解決がなくていいのか」などの質問が出ており、また体験的に対話の方法を伝えていくにはどうしたらいいかという課題を感じているという。

以上の実践や課題について、玉置さんからフロアに対して意見が聞きたいという話が出た。これに対して、同じ部屋の他の発表者 4 名と世話人 2 名でリフレクティングを行った。その中では、すぐに解決するのではなくあいまいに耐えて、対話を続けることを心がけることを伝えようとしていた姿勢に感心したという声や、あらためて対話とは何かを示すのは難しいという声が出た。またファシリテーターが代弁するということがかえって十分な満足を得られないということに興味を感じたという意見もだされた。最後に、発表者からは、もらった意見を参考に今後もやり方をいろいろ模索していくという話をされ、まとめとなった。(森田展彰)

演題 10：オープンダイアログと大学教育：当事者と事例をふりかえる

麗澤大学で、オープンダイアログを大学教育の分野に取り入れるという試みについてその意図や概要の説明が花田氏からあった。その中で、最近の学生の精神的な困難を様々なデータで示し、一般の学生でも当事者性を持っていることを指摘した、そして、花田氏のゼミでは、

学生が、対話をテーマにした卒業研究において、当事者研究を行い、それを互いに発表しあう中で深めるという方法を行っていることが紹介された。共同発表者の半田氏によれば、障がい学生支援課の立場から、この花田氏の教育を支えるという体制をとっていることについて話された。そして、こうした方法は、学生への教育と支援を結び付けるという点で特徴があるという説明があった。

花田氏と半田氏の発表の後に、実際にこの方法でゼミに参加した 4 人の学生が、各自の体験を発表した。学生からは、他の学生と対話を行うことで、内的な対話と向かい合うことは、かえってつらい面もあるが、それをこえてやっていくことで自分と他者を分けてとらえられ、周りの意見を過度に気にするようなことがなくなったという感想が出されていた。また、学生同士の対話が進むと、指導の先生に頼らなくても、安心感や安全感をもてる居場所を感じることができるようになったという意見もでていた。以上のような学生の発表の後で、これを受けての花田氏と半田氏によるリフレクティングが行われ、さらにその感想を学生が述べて終了となった。学生の中にある当事者性を対話で検討させることにより、教育一心の苦しみの支援—学生同士の居場所づくりという総合的な意味を持つ活動にまで到達されており、とても感銘を受けるものであった。(森田展彰)

演題 11：オンラインによるオープンダイアログ研修の可能性

臨床心理士である八巻氏はオープンダイアログの研修を開催されておられ、研修会参加者である齋藤氏と茂木氏との 3 名で対話的に取り組みをご紹介いただきました。オンラインによる「心理臨床家の集い」から「体験の会」「練習の会」へと発展させ、オンラインを中心に対面でも研修を開催されておられます。研修では「呼び名をどうするか」についてがテーマとなり議論となったこともあったそうで、「安心・安全」とは何か、互いにヨコの関係であることに意識的に取り組まれているそうです。

<オンラインと対面での研修について>

- ・オンラインだと相手の視線を意識しなくて済むため、自分の内面から上がってくるものを見つめやすくなる
 - ・視線、雑音、相手の存在感（垂直のバックグラウンド）が、対面だと気になってしまう
 - ・対面の方がメンバー 1 人 1 人の表情、サインに気づきやすい
 - ・オンラインだとロールプレイングが難しくなる
 - ・オンラインにより、自分のうなづきや反応の仕方が見えるのはいいトレーニングになる
- など、オンラインと対面とのそれぞれの利点を比較し、対話の際に、メンバー間でいかにして水平にやり取りしていくかを大切に考えておられたのが印象的でした。(石橋佐枝子)

分科会 E 会場

分科会 E 会場は「いろいろな対話の場」と題し、さまざまな場での実践について、3つのご報告を頂きました。演題①サウナと対話実践のワークショップ「メンタルヘルススーパー銭湯」は、星野俊弥さん、廣岡孝弥さんほか3名の共同発表者の方から、サウナという「すこしの目的」をもって立ち寄れる場を、対話の場として創造していく試みをご紹介いただきました。気持ちも身体も暖かくほぐれそうな、自分もそんな場に立ち寄ってみたいと感じる、そんな魅力にあふれたご発表でした。演題②「演題：君を悩ますもの、ききたい！描きたい！演じたい！～シン・BaseCamp 流オープンダイアログ！？～」では、中島裕子さんら、就労継続支援 B 型 BaseCamp ごと一同より、活動の一端を演劇形式でご発表頂きました。人の悩みが、仲間との対話を通じて共有し暖かくほぐされていく様子を、ダイナミックな動きと声とで伝えて下さり、そのプロセスを全身で没入して体験できる、工夫と楽しみに溢れたご発表でした。演題③「『ライフラインとしてのダイアログ』ナラティブカーニヴァル参加レポート+α」では、菰沢明さん、岩本善人さん、西岡望さん、石井喜美江さんから、それぞれの活動と出会いのきっかけ、そこから生まれ芽を出した複数の試みについて、ご紹介を頂きました。安心と安全が保障される場をどのように創造していけるのか、対話を必要としている方々とどのように繋がれるか、など、対話を続けることをあきらめない、強い想いの詰まったご発表でした。いずれもバラエティに富んだ演題になりましたが、すべて創造性とチャレンジにあふれており、これまでのプロセスについてももっともっとお聞きしてみたくご発表でした。大変楽しく、また希望を感じるものでした。ご発表下さった演者のみなさま、本当にありがとうございました。(神野唯史、大井雄一)

オープンダイアログ 1day オンラインワークショップ

第一回

2022 年 11 月 6 日 (日) 9:30 ~ 16:45 オンライン開催

参加費：10,000 円

参加者：ODNJP 正会員

定員：30 名

第二回

2023 年 2 月 5 日 (日) 9:30 ~ 16:45 オンライン開催

参加費：10,000 円

参加者：ODNJP 正会員

定員：30 名

フィンランドの西ラップランド地方で生まれた精神科医療の包括的なアプローチ「オープンダイアログ」に関する初学者向けの 1day オンラインワークショップで

す。レクチャーとワークを通じてオープンダイアログの基本的な考え方や態度を学びます。2022 年度は計 2 回の 1day オンラインワークショップを開催し、約 60 名の方にご参加いただきました。2023 年度も継続して開催することを目指してまいります。

＜参加者の声＞

第一回目に開催されたアンケートより、一部を抜粋してご紹介いたします。改めてご参加いただいた皆さまに御礼申し上げます。残念ながらご参加いただけなかった皆さま、次回以降の参加を検討されている皆さまは、ぜひご参考になさってください。

- 大満足です。もっと学びたい、実践したい気持ちになりました。
- 参加者の皆様がオープンダイアログに関心がある方々なので、非常に居心地の良い研修会でした。もっと深く学びたいと改めて思いましたし、職場でも広げていきたいと考えています。
- シナリオロールプレイにおいて、めい役を担当しました。語るができるために必要な配慮、構造、丁寧な対応、問題(事象)の捉え方など実感できました。研修全体が対話実践のトレーニング、イメージにもつながった。本当にありがとうございました。
- 満足ばかりです。1日の使い方もじゅうぶん配慮されて、充実しています。参加者との出会いも良かったです。WS かどうか別として、うまくいかなかった事例からも教えていただきたいと思っています。
- 今回特に良かったのは、読み上げる形での「シナリオロールプレイ」でした。初めてでも無理なく体験できて、なおかつセッションを体験できるという、よく考えられたものだと思います。そこで話すことで、「良い意味でオープンダイアログが分からなくなった」という感じを受けました。実際に自分で言葉を発することで進んでいく、そういう感覚を覚えました。今は学びと共に、対話の実践を日常的にも続けて行きたいと思っています。今後ともよろしく願います。
- スクリプトを読んでいくロールプレイングや、リフレクティングをされるとどう感じるか等、とても工夫された研修で、いろいろと考えが整理されました。是非、継続的な研修を受けられればと思います。
- 2 DAYS にして、もう少し踏み込んだかつ実践的な対話ワークの機会のボリュームが増えてもいいような気がしました。
- コロナ前から 3daysWS などに参加したかったが、ようやく、1 day に参加できました。非常に良かったです!! ありがとうございます。今、ここにいることを大切にしながら対話をする、その体験は参加者は同じ体験をしているが、それぞれ感じたり、考えたりしていることは多様性があり、それがまた異

なる場をつくっていくこと、そのためには安心な場の提供、ていねいな対応が大切なんだろうなと思いました。自分が経験してきたことを通して、ものごとをみがちですが、価値観も含め、そういったことを感じている自分も含めて、その場をていねいにみつめられる姿勢を学んでいきたいと思いました。

- とても良かったです。知りたかったことがわかり、また新たに疑問も生まれました。具体的には、対話をする力、対話を続けるとはどういうことなのか、もう少し知りたいと思いました。テクニク的なことだけでなく、概念としてどのように捉えているのかが知りたいと思いました。
- 葛藤を抱えていたり、悩んでいたりしていいんだなと思えたことが大きかったです。そこを聴いてくれる人がいることで、話す人がもともと持っている力が開いてくるのかなと、そんなことをイメージしました。逆にいうと他者ができることはそのくらいかもしれないとも思います。でもそれは他者だからこそできることで、そこが面白いところなのかなと、あらためて感じました。「そして聴くことだけに集中していいんだよ」と言われたことも今後の取組の大きな支えとなりそうです。聴くことそのものが、他者と関わることなんだと思えて、それが嬉しかったです。
- 非常に良い経験となりました。場づくりと運営がそもそもオープンダイアログ的であるということがとても重要なのだと改めて参加者としてしみじみ感じました。ありがとうございました。事前にシナリオとスライドもシェアしてくださり、1日の長丁場に見通しをもって備えることができましたし、導入からとても丁寧にゆっくりと場を整えてくださり、チューニングしていけました。グループワークも講師の方が付いてくださっていて心強かったです。また休憩が適切なタイミングで複数回あったことも有難かったです。
- 午前中の講義にファシリテーター間のダイアログがあることで、イメージを広げることができた。シナリオによるロールプレイはとても良かった。初回のオープンダイアログでの導入時の言葉や安全な場の作り方が疑似体験できた。リフレクティングワークは、色々な方の気づきを置くことで、学びが増えた。聞くことと話すことをわけること、頭の中でもしゃべらない、1対1で話さない理由、意見が一つにまとまってしまう怖さ、自分が自分で居られるチーム作りなど、大事なキーワードを学べた。
- 先生方や参加された皆さんのあたたかさや丁寧さ、真摯なお気持ち伝わる素敵な会でした。新しい視点を沢山頂き、また内省する場にもなり、学びの多い、でも居心地の良い充実した時間でした。
- 丁寧な説明から始まって体験する場を設けていただいてとても良かったです。自分の内なる声を聴かず

に人の話を聴くということ……とても難しかったです。日々のかかわりの中で難しさを思い起こしていきたいと思います。

- ロールプレイのシナリオは原則などポイントが網羅されていてすずめかたの参考になり、それが特に満足でした。シェアリングのときに拳手の仕方がわからなかったので発言出来なかったのですが、はなしたいことはたくさんありました。
- ファシリテーターの皆さんが入念に準備されたのが良く分かります。参加人数も適切でした。大変ありがとうございました。ワークショップを継続して、更に他の多くの人にも機会を与えて下さい。自分としては、これを機会に家族会の中でODを少しずつ広げていこうと思います。
- ファシリテーターの方々の対話から多くを学ぶことができ、また参加者同士の対話でも自分の話を受け止めてもらえた感覚がとても多くあり、有意義な時間でした。「聞き流す」「支援者の声が一致することでクライアントを閉じ込めてはいけない」など、多くのキーワードが心に残りました。
- 暖かい雰囲気があったこと、たくさんの参加者がゆっくりと発言できる機会があったことなどが良かったと思います。僕も暖かな空間に包まれて、とても気持ちの良い時間を過ごせました。一方で、これは僕自身の問題かもしれないのですが、本当は言いたいこと、心の底で思っていて、かつネガティブな内容のことを話せないことで、自分を誤魔化しているような、偽っているような、苦しさを感じていたのも事実です。 終わり際にその想いをブレイクアウトルームで話した際、参加者の1人の方が応じて下さり、そこでブレイクアウトルームが終わってしまいました。もし時間があつたら、僕がオープンダイアログに取り組んだり関心のある人たちに對して抱えている、切実で批判的な想いを、聴いて頂けたかもしれません。 オープンダイアログは決してカタルシスを味わうための場ではないと思いますが、本当は言いたいこと、言葉にしたいこと、出したい感情があるのに、オープンダイアログの暖かく、和やかな雰囲気を守るためにそれらの気持ちを抑えないといけないという状況が続くとしたら、それは素晴らしいことなのか、迷う気持ちがあります。ありがとうございました。ほんとうにいろんなことが学べた。自分の聞き方、言葉の置き方などが、まったくできていないことが実感できた。自分の中で心が動き、そこから生まれつつある言葉をそのまま出せるようになるには、途方もない時間がかかりそうな気がした。さまざまな人とやり取りできることが、自分の中で固定化していくオープンダイアログを良い意味で揺らしてくれた。
- いろいろな方が関心をもって自分のフィールドに取り込めないかという期待を持って参加されているこ

とが分かり刺激になりなりました。基礎的なことはご存知で参加されていた方が多かったと思います。が、簡単な解説や日本の ODNJP の課題についてももう少し詳しく知りたいと思いました。

Dialogue on Open Dialogue オープンダイアログをめぐる対話 ーダニエル・マックラーさんを迎えてー

2023 年 5 月 7 日 (日) 13:00 ~ 16:00

場所：東京大学駒場 I キャンパス

KOMCEE WEST レクチャーホール

(オンライン同時配信、アーカイブ配信あり)

参加費：正会員 1,000 円、賛助会員 2,000 円、

非会員 3,000 円、当事者・家族 1,000 円

登壇者：ダニエル・マックラー (Daniel Mackler)、
松田博幸、斎藤環

ダニエル・マックラーさんの映画『オープンダイアログ：フィンランドにおける精神病治療への代替アプローチ』の上映は、日本でオープンダイアログが広く知られる一つのきっかけとなりました。2013 年の上映から 10 年経とうとしている今、ダニエル・マックラーさんを迎え、オープンダイアログとは一体何か、日本ではオープンダイアログはどのように受け止められてきたのか、また今後どう展開していくのか、などをめぐって対話が行われました。当日は、現地に 53 名とオンラインで 133 名の方が参加くださいました。マックラーさんからは、あの映画をなぜ撮ったのか、そして映画によって広く世界中の国にオープンダイアログのことが伝わり、多くの国でトレーニングコースが実施されてきたが、西ラップランドでのような成果は挙げられていないことなどをお話くださいました。その次に松田さんよりオープンダイアログとの出会いや、マックラーさんの映画上映会を企画された背景や思いなどをお話くださいました。そして、最後に斎藤さんより精神医療の現場で現在どのように変化が起こって来ているのかということをお話くださいました。これら 3 人のお話を受けて、まずは 3 人の対話が重ねられて、その後現地会場とオンラインとの参加者との対話がさらに重ねられて行きました。オープンダイアログの理想的な結果をなかなか得られない日々の実践の難しさを共有するとともに、ボトムアップでの未来への希望ある変革を進めていく重要性について共有がなれました。今回のイベントを通じて、参加者のみなさんそれぞれがこれまでの活動とこれからの活動について、それぞれの立場で豊かな対話に参加出来たことと思われました。(笹原信一郎)



イベントの様子

オープンダイアログの未来を語る会

第 6 回

2022 年 7 月 16 日 (土) 13:00 ~ 16:00 オンライン開催

第 7 回

2022 年 12 月 3 日 (土) 9:30 ~ 12:30 オンライン開催

第 8 回

2023 年 3 月 19 日 (日) 9:30 ~ 12:30 オンライン開催

第 6 回～第 8 回共通

参加費：無料

参加者：ODNJP 正会員または賛助会員

運営委員 2 名が持ち回りでファシリテーターを務めて、「オープンダイアログの未来を語る会」を、今年度は昨年度に引き続き第 6 ~ 8 回と合計 3 回実施させて頂きました。この会は、何かを決めたり、教えたり、トレーニングしたりする場ではなく、予めテーマを決めるということもないという企画です。オープンダイアログについて思うこと、期待すること、不安なことなど、オープンダイアログに関わることすべてについて、参加者が自由に語っていただき、お互いの声に耳を傾けることを目的として継続的に開催を重ねて来ました。会の進行は、当日の参加者のみなさんのご意見などもうかがいながら、ファシリテーターが責任をもって行い、当日担当のファシリテーターの 2 名以外は、すべての参加者が対等な立場で参加して行われています。毎回さまざまな声をいただき、対話の素晴らしさを感じて取り組んでくださっている方々が、それぞれの現場で抱えておられる難しさについて、声を出して共有して下さっています。お互いに共有したことで、さまざまな類似の体験に関する新たな声につながっていくという会となっていて、共有の大切さと意味を全体で味わう雰囲気が参加された多くの方に好評を頂いています。(笹原信一郎)

05 アドバンストコース

2022 年 10 月、24 名の受講生とともに、アドバンスト・トレーニングコースがスタートを切りました。このコースは、基礎トレーニングコースの次のステップとして、より深い内容を学ぶことのできるコースとして、今回初めて設計されたものです。コースは大きく分けて、実践に関する重要なエッセンスを全員で学ぶ「理論」、対話実践の動画などを持ち寄り小グループの中で相互に学ぶ「スーパービジョン (SV)」、自身のネットワークメンバーとの対話を通じ小グループ内で自己の理解やネットワークとの対話の重要性などを学ぶ「関係性の世界の探求 (ERW)」の 3 つのパートに分かれています。初めての試みとなる大きなコースとなりますが、対話実践の社会実装をより積極的にすすめひとりでも多くの方にサービスを提供していけることを目指し、一步一步、着実に歩みを進めていきたいです。(大井雄一)

06

オープンダイアローグの本紹介

会報 No.4 に続き「オープンダイアローグに関連する本」をご紹介します。著者からの紹介です。気になる一冊が見つかれば、ぜひお手に取ってみてください。

トム・アンデルセン 会話哲学の軌跡
リフレクティング・チームから
リフレクティング・プロセスへ
著者：トム・アンデルセン
訳：矢原隆行
出版社：金剛出版



いまこうしてこの会報をお読みのあなたは、おそらく、オープンダイアローグに関心をお持ちの方でしょうから、リフレクティングという言葉もご存知かもしれません。では、トム・アンデルセンについては、いかがでしょうか。「リフレクティングという会話の方法を発明した人？」たしかに、そんなふうにも言えるかもしれませんが、それだけで通り過ぎてしまうには、彼と彼の仲間たちが生みだしてきたもの、そして、いまでも世界各地で大切に受け継がれているものは、あまりに魅力的です。フィンランドのケロプダス病院で生まれたオープンダイアローグ、スウェーデンのカルマル刑務所で生まれたトラリアローグ、様々なダイアローグ実践は、北欧のいかなるネットワークで育まれてきたのでしょうか。ノルウェー北部のトロムソという町のひとときわ澄んだその水源には、未だ汲み尽くされていない会話哲学と実践の身振りを見つけることができます。そのことを、どうかあなた自身の手で本書のことばに触れながら、味わっていただければ幸いです。(矢原隆行)

オープンダイアログ 私たちはこうしている

著者：森川すいめい

出版社：医学書院



対話の場を開くにはどうしたらいいでしょうか。安全に、安心して開くには。

ケロプダス病院から始まったオープンダイアログは、とても傷ついた人たちの間で行われています。しかも声を、自分の権利を発言することの制限を受けた人たち、立場が弱くなる状況にある人の声を聞く場として誕生しました。

その活動は、ケアになったり癒しになったりすることもあります。しかし時には傷ついた人がより傷つく場になることもあります。対話が必要だということは、相互理解が不十分であったり、または相互の関係性に何らかの課題があったりするというわけで、そうでなければわざわざ対話の場を持つ必要はないのかもしれませんが。

ゆえに、傷ついた人たちを交えた対話の場を開くようになったらならば、その覚悟と責任をオープンダイアログ実践者は持たなければなりません。安全に開くことができないならば対話の場は対話にならず、人をより傷つけるものになってしまうでしょう。

本書は、ケロプダス病院の実践から創造された対話の工夫を見聞きし、こんどはそれを自分たちの場所で実践し、そのプロセスの中で発見した工夫をフィンランドの事例も交えながら書いていったものです。どのようにしたら安全に対話の場を持つことができるか。どんな対話の場の設定が助けになっていくのか。本書を手にとり下された方にとっての本書は、他者のアイデアを聞いて、それを参考にしたり、またはさらなる新しいアイデアを創造するきっかけになると思います。一人ひとり状況は異なるゆえに、これが正解だということはないのだと思います。よって私たち実践者はたくさん考えやアイデアを準備しておいたほうがよいはずで、そういうわけで本書には正解は書かれていません。

声を出すことができなくなった人たちの声が聞かれ、それが日本中であたりまえのこととなるように、そんな願いを本書には込めました。(森川すいめい)

精神科の薬について知っておいてほしいこと 作用の仕方と離脱症状

著者：ジョアンナ・モンクリフ

訳：石原孝二、松本葉子、村上純一、高木俊介、岡田愛

出版社：日本評論社



この本は、オープンダイアログについて書かれたものではありませんが、オープンダイアログの実践を考えるうえで重要な視点を提供してくれるものだと思います。本書では、精神科の薬の作用の仕方に関する「薬物作用モデル」が提唱されます。「疾病中心モデル」では、精神科の薬が、脳の異常な状態（脳内伝達物質の不均衡）を是正することによって作用すると考えますが、「薬物作用モデル」では、精神科の薬が、身体的なプロセスや心の状態を全般的に変化させる（ある意味、異常な状態を作り出す）ことによって作用する考えます。そうした状態が助けになる場合もありますが、助けにならない場合もあるのです。

精神科の薬（向精神薬）が登場して70年になりますが、精神科の薬がどのように作用するのかは、実は未だによく分かっていません。長期的な服用の影響や薬をやめる際の離脱症状についても、研究が不足していて十分な知見は得られていません。薬を勝手にやめたから調子を崩したと言われることがよくありますが、それは離脱症状のせいなのかもしれません。

日本では処方薬の処方権は医師のみにあります。医師が処方に対して責任をもつのは当然ですが、精神科の薬は本人の身体や生活と人生、また家族の生活と人生に多大な影響を与えます。そのことについて医師が十分な知識をもっているわけではありませんし、将来の予測ができるわけでもありません。オープンダイアログという実践は、何よりも「治療」についてオープンに話し合い、その話し合いの中で治療方針を決めていくという実践です。精神科の薬についてオープンに話すことももちろんそこに含まれるはずで、日本においても、また海外においても、精神科の薬についてオープンに話すための環境やツールは圧倒的に不足しています。本訳書がそうした欠落を少しでも埋めるものとして利用されることを願っています。(石原孝二)

07

メッセージ

Daniel Mackler

映画『オープンダイアログ：フィンランドにおける
精神病治療への代替アプローチ』監督

Greetings to ODNJP. I am very grateful for the opportunity to have met so many of you in Tokyo in May of 2023. I have been thinking a lot about the subject of implementing Open Dialogue in Japan, and I have been trying to think creatively. In a rigid top-down psychiatric system like that in Japan, one that does not promote much dialogue at all, implementing OD is naturally a daunting prospect. So my thinking has gone in another direction: away from trying to create a Western Lapland-like program in Japan, but instead to figure out how to create a more public dialogue between members of the Open Dialogue Network Japanese and traditional mental health providers, hospital leaders, and politicians, so that an actual stage can be set for implementation of a better program. I suspect that until this greater systemic dialogue happens, with politicians and other powerful policymakers included, implementing anything that really can help patients recover from psychosis may be impossible. So my thought, in brief, is this: to use the ODNJP network's skill for dialogue to wake up and shake up those in power — and through this to open the door for healthier psychiatric change.

A warm hello from New York!
Daniel Mackle

ODNJP のみなさんこんにちは。2023 年 5 月の東京にて多くの方とお会いできる機会を持たたことに大変感謝しています。私は日本でオープンダイアログを実装することについて多くを考えてきましたし、〔そのことについて〕創造的に考えられるように挑んできました。日本のような厳格なトップダウン型の精神医療システムのなかでは、対話は全く促進されませんし、当然ながら OD 実装の見通しは立ちません。そのため、私の考えは異なる方向へと向かいました。つまり、西ラップランドのようなプログラムを日本で作ろうとすることから離れ、代わりに、オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパンのメンバーと、伝統的にメンタルヘルスを提供している人々・病院のリーダー・政治家などとの間で、より公的な対話を作る方法を明らかにしようということです。そうすることで、より良いプログラムを実装するためのお膳立てが整うのです。政治家やその他の強力な政策家と共に、より強力でシステムティックなこの対話が起らない限り、患者がサイコーシスから回復 (recover) するために役立つ何かを実装することは不可能であると推察しています。私の考えを簡単にまとめればこうなります。ODNJP のネットワークの対話スキルを、権力者たちを目覚めさせ揺さぶるために使ってください。そして、これを通じてより健全な精神医学の変化に向けて扉を開いてください。

A warm hello from New York!
ダニエル・マックラー

オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン

<https://www.opendialogue.jp>

ODNJP 会報 No. 5

2023. 7. 1 発行

編集責任：笹原信一郎、大谷保和（ODNJP 広報委員）

編集：杉本光衣（事務局員）

《許可なく転載を禁じます》